

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	27K19	氏名	棗 まゆみ
研究主題 —副主題—	小学校で取り組むソーシャルスキルの指導内容とカリキュラム —「全校一斉方式」に「学級単位方式」を加える効果の検討—		
所属校	府中市立四谷小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>自治体規模の社会的スキルの育成を目指したプログラムは、これまでもいくつか存在する。しかし、指導内容や教育課程への位置付け、実施時間数などは様々である。そこで、本研究は、学校規模・自治体規模で行われている、社会的スキル育成のプログラムの先行研究を踏まえ、A市の小学校で共通に実施可能なソーシャルスキルの指導内容とカリキュラムを開発し、より効果的な実施方法を明確にすることを目的とする。</p> <p>&lt;研究の仮説&gt;</p> <p>A市の小学校の生活目標を分析し、全校一斉方式 SSE の実践や他市での実践を踏まえて学校規模で行う集団ソーシャルスキルの指導内容とカリキュラムを開発し、試行的に実施する。その際、詳細に効果を確認することを通して、ソーシャルスキルの能力の向上に寄与する有効なプログラムの構成を特定することができる。</p> <p><b>【作業仮説】</b></p> <p>生活目標の分析を基に、所属校でのソーシャルスキルの指導内容とカリキュラムを開発する。そのプログラムは学校規模で行う集団 SST（以下「全校一斉方式」と学級単位で行う集団 SST（以下「学級単位方式」）の2段階から構成する。この2方式の提示に時差を設け、その時々での児童のソーシャルスキルの自己評価の向上の程度を検証する。これは「全校一斉方式」単独の効果と、「学級単位方式」を加えた場合の効果との詳細な差異を明確にすることになる。以上のことにより、効果的なプログラムの提示方法の必要十分条件が確定されるであろう。</p>
II 研究の方法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ソーシャルスキル・社会的スキルに関する文献、先行研究調査・収集・整理</li> <li>2 自治体で取り組んでいる社会的スキル育成プログラムの調査・収集・分析 「全校一斉方式」についての調査・分析</li> <li>3 横浜市教育委員会へのY-P作成に関する聞き取り調査・分析</li> <li>4 Y-P 実施校への実態聞き取り調査・分析</li> <li>5 A市の小学校の生活目標の調査・分析</li> <li>6 目標スキルの決定と指導時間・内容等の検討・所属校の「全校一斉方式」年間指導計画作成</li> <li>7 全校一斉方式（朝会）の実施：9月</li> <li>8 学級単位方式（授業）と質問紙調査（全3回：事前・事後1・事後2）実施</li> </ol>

	<p>A群（朝会+授業1週間目）・B群（朝会+授業2週間目）・C群（朝会のみ）</p> <p>9 対象教員への聞き取り調査</p> <p>10 検証授業後の児童の感想文の分析</p>
<p><b>III 研究の結果</b></p>	<p>1 横浜市教育委員会、さいたま市教育委員会、川崎市教育委員会、新潟県の学校で実践されている「全校一斉方式」の実践について、教育課程への位置付け、ターゲットスキル、アセスメント等の違いをまとめた。</p> <p>2 A市立小学校の生活目標の分析結果と所属校の生活目標から、「全校一斉方式」年間計画を立てた。</p> <p>3 「全校一斉方式」と「学級単位方式」を9月に所属校で実施し、質問紙調査を用いて「全校一斉方式」単独の効果と、「全校一斉方式」に「学級単位方式」を加えた場合の効果について分析した。事前から事後1の変化を見ると、B群はA群と同様にソーシャルスキルの向上に効果が見られた。しかしながら、C群の「全校一斉方式」の効果には有意差が見られなかった。そして、授業を加えたA群では事後1、事後2に有意な上昇が「やさしい言葉」「相手を思いやる」双方で見られた。同様に、B群も事前と「全校一斉方式」実施後2週間以内に「学級単位方式」を加えた事後2の間で、両尺度に有意な上昇が見られた。C群については、事後同様の授業を実施している。</p> <p>4 児童の感想の結果から、「学級単位方式」で用いた「ありがとうカード」の活用を肯定的に捉えた児童が多いことが分かった。</p> <p>5 対象教員への聞き取りは、全ての「学級単位方式」終了後に行った。そこでは、教師自身の児童理解の視点の変化や深まりや、指導観の変化、授業の前で子供の行動や活動に肯定的な変化が見られたことを語った教師が多かった。</p>
<p><b>IV 考察</b></p>	<p>3の結果から、「全校一斉方式」単独では一様に効果が認められないことが示された。また、「全校一斉方式」に「学級単位方式」を加えることの重要性が示された。「学級単位方式」の実施時期については、「全校一斉方式」実施後、1週間後でも2週間後でも差はなく、「全校一斉方式」に加えて少なくとも2週間以内であれば「学級単位方式」を実施することで、児童のソーシャルスキルへの自己評価を確実に向上させることが確認された。</p> <p>4の結果から、「ありがとうカード」の使用は活動中の行動リハーサル機会を増やし、さらに、カードの授受そのものが、スキルの遂行と受理とを明確に意識化させ、双方の喜びを感得させることに有効であったと考えられる。</p> <p>5の結果から、検証授業後に児童の行動や活動・学級の雰囲気には肯定的な変化が報告され、「全校一斉方式」「学級単位方式」の双方が児童のソーシャルスキルの向上に影響したことが示唆された。</p> <p>以上のことから、児童のソーシャルスキルの能力を向上させるための有効なプログラムの構成を特定することができたと考える。</p>

